

A study of Kengakusoshi Emaki(Scroll Painting) owned by Musashino University Department of Japanese Literature and Culture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河原木, 恵, 鷹谷, 薫, 張, 家瑜, 明道, 拓実, 岩城, 賢太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/514

武蔵野大学文学部蔵『賢学草子絵巻』の紹介と研究

河原木恵 鷹谷薫 張家瑜 明道拓実 岩城賢太郎

一、はじめに

平成二十五年年度末に武蔵野大学文学部所蔵となった『賢学草子絵巻』（仮称）について、平成二十六年年度に開設された修士課程文学研究科の開講授業科目「伝統文化研究1A・1B」において、調査・検討を重ねた。当該科目は、能・狂言、歌舞伎

の研究をテーマに開講されているものであるが、『賢学草子（日高川草紙）』は、能『道成寺』『鐘巻』、歌舞伎舞踊『京鹿子娘道成寺』等、中世・近世芸能における「道成寺物」の素材・典拠として、『道成寺縁起』と同様に注目される作品である。本稿では、当該科目受講者で行った調査・検討をもとに、武蔵野大学本を紹介し、若干の考察を試みたい。なお右の執筆者の他に、佐藤悠里と王娟が「伝統文化研究1A」を受講し、発表を担当した。

二、武蔵野大学文学部蔵『賢学草子絵巻』翻刻

武蔵野大学文学部蔵「賢学草子絵巻」全一卷一軸は布函入りで、見返し・布函ともに、未記入の題簽が貼られている。紙高

約21・8糎×全長1204糎で、本紙は全9紙から成る。表紙は草花文様入綴子装で、料紙は鳥の子紙である。以下に、本絵巻の詞書（画中詞を含む）の翻刻を掲げる。絵巻の構成と絵図については、稿末に画像資料を掲載したので、参照されたい。

〔詞書翻刻〕

〔第一図〕

あらく

うつくしの

姫君や

あちきなや

（見返し）

九曜文庫（蔵書印）

（第一紙）

この姫君十六になり侍るに
さらはみやこにのほりたまひ

いにしへ人のよすかをも
たつねたまへとて都へこそ
のほられけれ

〔第二図〕

「(第二紙)

うれしや

〔第三図〕

京近く

なり

ける歎

あれは

いつこの

山にて

候そや

さて京につきよすかたつね出

こゝろ静に住給ふにやよひ十日あ

まり清水にまうて待るに

十七日の月影音羽山の梢ほのかに

露わたりたる夜の気色なかも

いりたるに同じ通夜の人の中に

いかなる人にかた、うかみに

音なしの瀧たにあるに音羽山

なかれてぬる袖とたに

みよ

さすかうちおきかたくて

か關(二字分難)「」

なにもたのまむ山水の

あさくや音にたて

むとおもひし

〔第四図〕

「(第三紙)

〔第五図〕

夜もすから言かたらひ明行

は姫きみのかへるかたをしら

むとてつれたりし童を

つけてすみかをたつね

ける

〔第六図〕

「(第四紙)

さるほどに賢学は人しれす

しのふに此松風をたよりとして

いかならむ水のそこまでと契

けるにありし夢の事とも

かたりけるにいと、契も深く

おほえてかへりては夢も

うつ、も

同しはかなさとうちなけき

けり

右摘要

〔第七図〕

賢学つくく〜とあむし侍るは此たひ
ほんなうのきつなをきらすはまた
いつのよにかしゆつり生死の
縁ともなりなむと思ひとりて
姫君にいとま申けるにあく

かる、

魂はいつくまでもと恨給ふ

摘要

〔第八図〕

なちの瀧にうたる、ほとに
まほろしにうらむる面影

みえける

一七日瀧にうたれ下向するも

なほ

かけのやうにはなれすきの國
ひたか河に来けるこの河をり
ふし水まさりて舟わたし侍るに
あとよりさたかにかの人のこゑ
に聞えて何しにすてたまふ
そや野くれ山くれこれまで
まいり

たるこゝろをなさげなく

し給ふそや

〔第九図〕

浪に入ても

なとか

おくれ

侍らん

こゝなる女房の

追つかむと

くるそや

賢学には

なきよし

申され

候へ

舟人も

こけや

御坊も

にけよ

やり

申ましや

〔第六紙〕

「(第五紙)

南無三所

権現

たすけ

給へ

賢学も舟人も肝魂消て

にくるに

今は大蛇となりて追声

いかつちのことしひと、

ころに

あるやうにてさけひけり

〔第十図〕

南無三宝

かなしや

古寺のありけるにかねを

おろしおきたる中に入

てかくれけれとしりてかね

をまきていかに御坊御にけ

ともそのことの葉は思ひ出し

たまはずや

〔第十一図〕

あらうれしや

ならくのそこに

入て出る事

あるまし

かねはくたけぬ

賢学をとりて

日高河の深きに

入けり

〔第十二図〕

かのふる寺に経よみ念佛して

供養しけりとなむ

〔第十三図〕

上 六十九翁文守與平

〔第九紙〕

三、武蔵野大学本と酒井家旧蔵との対照

武蔵野大学文学部蔵本（以下、武蔵野大学本）は、酒井家旧蔵『賢学草子絵巻』との関連が認められる。以下に武蔵野大学本の本文を掲げ、併せて酒井家旧蔵本の本文との比較対照を行^{（注）}い、本文の有無・相違を示す。傍線部本文は、酒井家旧蔵本にあって、武蔵野大学本には見えない本文を、二重傍線部本文は、武蔵野大学本の独自異文をあらわす。なお、次項の考察のため、

本文を(イ)〜(ヌ)の十項目に分けて示す。

「本文対照」

(イ)「この葉も御うれしさにてこそ候へ」

「あら〜めてたや〜」

「しゆつあみと申てかやうの御さしきへ参候てろさひ申候
はてはかなひ候はぬ物にて候おひさき見えてあら〜うつ
くしの姫君やあちきなや〜」

この姫君十六になり侍るにちゝのゆくゑも戀しくなとい
ふに付てさらは宮こにのほりたまふいにしへ人のよすかを
もたつね給へとて可然たよりにつけて都へこそほられけ
れ

(ロ)「京にてうつくしまれ人たつねてゐ中のさかな物にい
とまくれん」

「けにおもしろし〜」

「あら〜うれしや京かちかくなりけな」

「あれはいつくの山にて候そや」

「あれこそをとほ山みなみに候はやましないまちとしてき
やうへいりたまひ候はんするそや」

(ハ)さても京に付てよすかたつね出しこゝろしつかにすみ侍
り給ふにやよひの十日あまりにきよ水にまうて参つやし侍
るに十七日の月影をとほ山の木すゑほの〜とにほひ出お
りしも露わたりたる夜の氣色たくひなくなめいりたるに
おなしくつやの人の中にいかなる人にかありけんとりあへ

すたゝうかみにかきて

①音なしのたきたにあるにをとほ山なかれ出ぬる袖とた
も見よ

とあるをこれもさすかうちをきかたくて

②かことにもなにもたのまむ山水のあさくやをとにたて
んとおもひし

(ニ)この返しを見るにもいまはひた、けてこそおもひ侍りける
夜もすからとかくいひかたらひ明行は姫きみのかへる方
をしらんとてつれたりしわらはを付てともなる人にすみか
をたつねければ

(ホ)「なう〜物申候はんいつくより御物まいりの御方にて
御入候やらん又はやともいつくのほとにて候やらん」

「何事にてさふらうそや御すみかはしか〜の所にてさふ
らふ身つからか名をは松風と申てふけにふけて候又はとは
すかたりのにく者と申候母はをんなにて候ち、はおのこゝ
にて候年四十九に成候ほとにとしくれ春にもなり候は、五
十とや人の申候はんすらんきやもしなる御こ人かな〜」

(ヘ)さるほとに賢学は人しれすしのふにむすぶ露の命もいか、
とおほえて此松かせをたよりとしてたひ〜文を書盡し侍
れはもしほ草つもるしるしにや數ならぬ浪にも

よるへありていかならん水のそこまでも

契侍りけるにある暮かたに夕月よ影まつほと枕をかはし過
にし方の事なとかたり出すうちに身つから十より内の事と
やらんふしきの事の侍りつるめのといたきまかきのはなを

あひせしに修行者のやうなる物の身つからをかひしてにける
けるとやらん人々の申侍る也夢のやうにてさたかにおほえ
す候とかたりけりさてはうたかふところなしとにかくにの
かれさりける契也けりとかつはふしきに又はあさましくて
ありし夢の事ともしかく、かたりけるに女もいと、契も
ふくおもひける後におもひあはするにも夢をうたかひては
るくどくたりしもかやうに侍らんすくせなりと身ながら
もおろかにおほえてた、かへりては夢もうつもおなじは
かなさとうちあんし侍りけり

「天にあらはかくとこそおもひ侍れ」

「我も地にすまはとふかくたのみ侍る也」

(ト) 賢学つくくとあんし侍るにされは此たひほんなうのき
つなをきらすは又いつの世にかしゆつり生死のゑんともな
りなむとおもひとりて姫きみに申けるは

さても此世の中は夢のうちのゆめまほろしのうちのまほろ
し昨日はあれとけふはなし枕をならふるいもせつるにはを
くれさきた、ん事誠ニものしつく末の露のあたる世の中
にて侍る也君もまことの道におもひ入給ふへし此法師も
いま、てうかりし一ふしの契のすゑをおもひかへしふかき
山のいかなる木の本岩のかけにも後の世のつとめをおもふ
へし心よはくはかなふましといとま申てうち出んとしけ
れはあさましやかやうになかかましき契にやあさからす
おもひまいらせいかならむ火の中水のそこまでもをくれさ
きた、しと契參候つるかひもなくいつのまにかはりはて給

候御こ、ろそとてふししつみなきかなしむ事かきりなしそ
のま、おきもせてうちぬるよひの夢にもうかれし人にく
れしといつちともしらぬ野を分山をこえたひ行とおほえ
侍るにもかやうにあくかる、玉しひはいつとかまとひゆく
らん身なから行ゑなうなけかれてた、われにもあらでなけ
きふしぬ

「誠にこ、ろにまかせぬいのちにて候そや」

けんかくはひたみちにおもひ成てす行に出けるかまつみく
ま野にまふてんのこ、ろさしにてきのちにか、り心しつか
にあゆみ行にもおもひすてにし人のふとたもとにとり付て
うらむるとおもひてかへりみれば又夢のやうになり侍るほ
とに身なからもすてかねてか様ニやとなげきつ、なちにま
ふて、瀧もとにまいりたきにうたる、程にまほろしにうら
むる面影そみえける

「南無本地弥陀如来」

一七日瀧にうたれ宿願はたして下向するになをかけのやう
にはなれすひたすらうつ、のやうにおほえけるにきの國ひ
たか川といふ所に付ける此川おりふし水かさまさりて舟わ
たし侍るにうちのりて行はあとよりさたかに彼人のこゑと
聞えてなさげなし我をも舟にのせ給へつかの間もはなるま
しき物をなにとてうちすてさせ給候そや野くれ山くれこれ
までまいりたるこ、ろをはいかはかりの事とおほしめして
かやうになさげなくし給ふそや

(チ) 「舟人もこ、ろしてのせ給へや」

「浪に入てもなとかをくれ侍らん水のあはのうたかた人に逢はてはきえし」

「こゝなる女房のをよくともなく水の上を舟におひつかんとみえ候そやあらこはやく」

「をともせてたゝいそき御こき候へ身はけんかくにはなきそと申され候へしらぬかほしてゐるかひしちや」

「いつくまでとて御急候そやいまはいかににけさせ給ふものかしまいらすましきなりいとけなきいにしへなにのひか事もなきにかいし給ひしうらみはいかにすてたまひ候は、其時すてたまひ候へかしかいし給ふほとこのこゝろよりのかれぬ契とはおほさすやをろかの人や舟人もこけやく御坊もにけはにけよやり申ましやあらくうれしやく」

「なにのいんくわにかゝる人を舟にのせけるそや」

「南無大聖不動明王三所權現たすけ給へやく」

賢学も舟人もきも玉しひも身にそはすなにとかとしておねをきしへつけてけんかく舟よりとひあかり足にまかせてにけゆけはいまはさなから大咆と成てのかすましといふこゑは百千のいかつちのなるかときこへてにけんとすれとも一所にあるやうにてさらくにけえすこはいかに成ぬるそやたゝたすけ給へやくといふより外のこゑもなしはしめほとは三所權現こんかうとうしなとなへけるか後はかなしやくこはいかにくとはかりにておとるやうににけにけり

「なむ三寶くかなしやく」

(リ) あまりのかなしさに古寺のありけるうちへにけ入てみればつきかねをおろしをきたる下へいりてかくれけれといかにして知けむかねをまきていかに御坊御にけ候ともさしもをとなしの瀧とやついになかれ出んとあるふることにおもひよせしことの葉をはおもひ出たまはずや

「あらくうれしや此まゝならくのそこに入て出る事あるましはなる、事あるましやく」

かねはみちんにくたけてけんかくをとりてやかてひたか川のみかきに入れり

(又) 此事かくれなかりしかは賢学か弟子とも彼あとにたつね行て經よみ念佛申てあとをとふらひけり

「一」

「二 まつ經をよめ」

「三 たゝこんきやうしたる事よ妙法蓮華經く」

「あらくねふたやく」

右道成寺之繪一卷者

土佐彈正忠廣周眞筆

無疑候仍加愚筆證寫

而已

延寶五年

仲夏上旬

土佐將監光起(印)

四、武蔵野大学本と酒井家旧蔵本との比較分析

武蔵野大学所蔵『賢学草子絵巻』は、全体的に酒井家旧蔵本に比し簡略化されている。それは画中詞の本文に顯著であることを特筆しておきたい。無論、地の文における本文にも多少の異同は散見されるが、図中の発話程大きく削除されている部分は多くはない。概算であるが、全体を通して、約七割削除されている。ここから考えられるのは、むしろ文章が少ないが故に、読者による自由な発想が可能となっている、ということである。本稿では以上のことから考えられる点に注目し、本文を(イ) (又)の十項目に分割し、物語の展開に関わる部分を中心に抜粋し論じていく。前項の通り、酒井家旧蔵本文と比較し、武蔵野大学本において改変されている部分に二重傍線を付した。以下に、武蔵野大学本を基に酒井家旧蔵本と比較検討する。

冒頭部は、「しゅつあみ」と名乗る人物が座敷に来て語っているという状況説明である。

(イ) 冒頭部分の台詞中、武蔵野大学本の法師は酒井家旧蔵本に見える「しゅつあみ」という己の名を明かさず、何の為に姫の家を訪ねたかも記していない。

これは法師を賢学と想像させることで、幼い姫と賢学の初対面を表していると考えることができ、一般的に物語の展開が知られている前提で賢学の草子の展開を踏襲したものだと考えられる。また、「しゅつあみ」ではない人物が室内におり、もう一人の男性が外の方へ体を向けている。こ

れから話が進む方へと目線を誘導させるような配置である。

絵を見てみると、酒井家旧蔵本では廂の部分まで描かれている。また、室内の人物は、女性が四人であり服装も違う。更に男性に関しては、体の向きや「しゅつあみ」の位置、服装、扇などの違いがある。

(ロ) 第二図では、京へと続く道中での姫と従者と思われる人物との会話において、「田舎のさがな者に暇くれん」という発言を含む前後の会話文がほとんど欠となっている。その中で、酒井家旧蔵本「あらあらうれしや京近くなりげな」の「な」の部分が武蔵野大学本では「る歟」となっている。「田舎のさがな者にいとまくれん」という発言がないことにより、この一行の上品さをより際立たせるとともに、姫がただ「古人の縁をも尋ね」て京に上っているのみであると認識させている。また、武蔵野大学本では父親のことに触れていない。

また、「あれこそ音羽山、南に候は山科。今ちとして京へ入り給ひ候はんずるぞや」という発言もなく、姫がどちらから京に上ったかがわからない。武蔵野大学本では姫君一行の姿が半分しか描かれず、酒井家旧蔵本のように全体を確認することはできない。これは進む行程の違いを表しているのかもしれない。

(ハ) 京に至り、清水寺での場面で、通夜に集まっている人々の様子が異なっている。酒井家旧蔵本では髻を結っている男性が描かれる。また楽器は琵琶のみであるが、武蔵野大

学本では鉦やほら貝等の道具もおかれている。また、すやり震が描かれていることも大きな違いである。

本文としての相違点は、「ほのく」ではなく「ほのかに」と変更されている点と、和歌中の語の変化の点である。「音なしの滝だにあるに音羽山流れ出でぬる袖とだもみよ」の「だも」が「だに」となっている。また、二句目の「かごとにも」の部分が抜け、武蔵野大学本では「歎」の後ろに余白があるだけである。

次に和歌に関して考察する。

〔歌①〕音なしの滝だにあるに音羽山流れ出でぬる袖とだに見よ

〔訳〕音なしの滝でさえある音羽山。人に知られず、流れ出でしまった涙に濡れたわが袖だけでも見よ。

〔考察〕「音なしの滝」というのは、「音もなく流れ落ちる滝」から、音がしない、聞こえない、音信がないことの意を含ませる。音もなく流れ落ちる滝と、音信がないことが掛けられている。

「袖」によって連想されるものは「涙」である。滝によって袖が濡れてしまうことと、涙で濡れてしまうことを掛けている。音沙汰がないことによって、涙で濡れてしまった袖だけでも見てほしいという。

〔歌②〕か「」なにもたのまむ山水のあさくや音にたてむと思ひし

〔訳〕（音なしの）名前を信頼しましょう。その川が浅くなり

ましようか、いや深く音をたてようと思っていましたのに。

〔考察〕「なにも」は漢字をあてた際に「名にも」となる。「音なし」の名の通り、人に知られないことを表す。そして、「あさくや」にあるように、反語表現を用い、二人の仲が浅くなることはない、深くなるとする。この「音」は川の音と、噂を掛けている。

「思ひし」は、「思ふ」の連用形に過去を表す助動詞「き」の連体形がついたもの、思った。思っていましたのに、の意。

「音にたてむとおもひし」は、音をたてようと思った。「音に立つ」とは、「うわさになる」の意。ここでは、「思ひし」と過去の形を取っている。幼いころに賢学と出会った姫君による回想が入っているのかもしれない。

再び本文の考察に戻る。

（二）賢学と姫との歌の贈答の後、「この返しをみるにもいまはひた、けてこそ思ひ待りける」という記述が欠となっており、武蔵野大学本の本文が簡略化されている。

この一文が入ることで、歌の贈答としての形を成すのであり、また、答歌を受けた人物が「ひた、け」ている（思い乱れている）ことから、登場人物の心情描写を武蔵野大学本で欠としたことの意味は大きい。

（ホ）第六図の前にある「すみかをたづねければ」の部分が、「ければ」ではなく「ける」となっている。

第六図は、松風との会話の場面であるが、松風の発話は

武蔵野大学本にはない。

酒井家旧蔵本では、松風の家族構成や年齢などを松風自身が述べている。これによって酒井家旧蔵本は松風という新たな登場人物を強調する効果を持っているが、酒井家旧蔵本に見られる松風の発話によるここでの滑稽さが武蔵野大学本では薄れてしまっている。

しゅつあみの言葉や、道中の会話が削られていることとあわせて考えると、武蔵野大学本では面白味を与えるようなところは削られていると言えよう。

また、会話文自体は書かれておらず、絵についても違いがある。まず、松風と童だけであった酒井家旧蔵本に対して、武蔵野大学本にはもう一人女性が描かれている。二人の女性に注目して見てみると、むしの垂れぎぬは長く描かれ、身分の高さを表しているように思える。そうすると、二人の女性のうち一人は姫君である可能性も考えられる。その違いは人数の変化だけではなく、服装にもみえる。太刀を佩いていた童が、武蔵野大学本ではその代わりに扇を手している。また、酒井家旧蔵本には描かれていないが、童と女性の先に二人の男性が登場する。一人は馬の上に乗った僧とみられる。もう一人は荷物を担ぎ、仕えの者ではないだろうか。

(ハ) 第六回直後から第七回後の地の文において、武蔵野大学本はかなり文章を省略している。(ヘ) 部分のみを割合で見ると、実に約八割もの削除である。削除した部分には賢

学と姫の因縁に関する描写も含まれ、この描写がなくては『賢学草子』の物語の展開に筋が通らない部分ができしまふ。話自体が切り取られていてのせいかな、武蔵野大学本には絵が一つ少ない。それは、賢学と姫君が二人で語り合っている場面である。酒井家旧蔵本における絵は、姫君の夢見心地な様子と、賢学の思案気な様子の対比がなされている。この場面は、酒井家旧蔵本が「水のそこまでも」としている部分を武蔵野大学本は「水のそこまでも」としている。また、「うちあんじ侍りけり」の部分が「うちなげき侍りけり」となっている。どちらの部分も、本文を削除した文章への矛盾を少しでも軽減しようとしていることがうかがえる。

(ト) また、次の本文中における欠文も非常に長く、かつ物語の展開において非常に重要な場面が削除されている。

酒井家旧蔵本の絵では、賢学が出て行こうとするのを姫君が引きとめようとしている。賢学の袖を掴みながらも片袖で顔を隠し涙を抑えるようなそぶりの姫君が描かれる。武蔵野大学本では、賢学と姫君が向き合っている絵となっている。ここから多くの情報を読み取れるような描写はされていない。この箇所の文章も大いに削除されているためか、姫君の悲しみといった感情があまり描かれていない。酒井家旧蔵本の「姫ぎみに申けるは」が武蔵野大学本では「いとま申ける」となっていることから、姫君が呆然としているのを描写しているのではなからうか。ゆえに、「あ

くがる、玉しひはいつとかまどひゆくらん身ながら行ゑなうなげかれてたゞわれにもあらでなげきふしぬ」という部分「魂はいづくまでもと恨み給ふ」となり、姫君の心情の移り変わりを急なものとすることで、賢学の身勝手さ、姫の恨みの強さを表している。

武蔵野大学本は、賢学と姫の行動にのみ描写がなされており、モノローグ乃至発言のみの場面は物語の中心となる部分であれ、容赦なく削除されていることから、筆者山沢与平が、既に展開を知っている者に対し作った絵巻なのではないかと推察する。あるいは、山沢与平なりの『賢学草子』観を主張するためだったのであろうか。

これ以降の本文は、武蔵野大学本は省略した地の文に展開の辻褄を多少なりとも合わせるため、最低限の場面描写にとどめている。また、姫の面影の描写も最低限に止められている。

酒井家旧蔵本では、滝に打たれる賢学の前に姫君の姿が浮かんでいる。しかし、足元だけはまるで立ち上る霧のようになり、おぼろげではつきりとしなない。そして、顔を片袖で隠す草に、別れ際の姫君のことが思い返される。これに対し、武蔵野大学本では、姫君の足元を含め、全身がぼんやりとした描かれ方である。そして、黒い雲が姫君の付近を漂い、まさに暗雲が立ち込める状態となっている。

姫の怨念により賢学が恐怖するのか、あるいは賢学は大して意識していなかったのかは、読者の読みに委ねられて

いる。さらに酒井家旧蔵本では「たきに」としか書かれていないところを、武蔵野大学本では、「なちの瀧に」と細かい場所まで指摘している。熊野三山に参るという賢学の発言をより正確に描写するためだったのであろう。滝に打たれたのちも姫は影のようにはなれなかったが、武蔵野大学本は「下向するも」としており、「下向するに」とした酒井家旧蔵本よりも怨念の強さをうかがわせる描写がされている。

(チ) 第九回直前に、三箇所、酒井家旧蔵本と武蔵野大学本の間には小さな相違点が見られる。「ひだか川といふ所に付ける」が「来ける」となっていること、「彼人のこゑと聞えて」が「こゑに聞えて」となっていること、そして「なにとてうちすてさせ給ぞや」が「なにしにうちすてさせ給ぞや」となっていることの三点である。この三点は物語の展開に大きく関わることはないが、これまでの小さな相違点同様、酒井家旧蔵本との違いを多少なりとも表現する筆者与平の一種の作為があつたのではないかと推察する。

第九回における姫が賢学を追う場面では、やはり武蔵野大学本では台詞が少ない。

ここには武蔵野大学本の筆者である山沢与平の「より絵に注目してほしい」という意図が垣間見えるように思う。

酒井家旧蔵本では、姫君が岸のぎりぎりまで止まっているように描かれるが、武蔵野大学本では姫君が勢いよく川へ飛び込む姿で描写されている。武蔵野大学本の姫君は裸足

であることが、その足元からうかがえる。

舟人の発言に、酒井家旧蔵本と武蔵野大学本とでは若干の相違が見られる。「おひつかんとみえ候」が「おひつかんとくるぞや」となっており、今にも追いつこうとしている姫君の執念を感じさせる表現に変わっている。これに呼応するかのように、賢学と舟人が、「きも玉しひもみにそはず」と表現されている酒井家旧蔵本に対し、武蔵野大学本は「肝魂消て」「にげゆけば」を「にぐるに」「のがすまじといふこゑ」を「追声」、「百千のいかづちなるか」とを「いかづちのごとし」、「一所にあるやうにてさら／＼にげえず」を「一所にあるやうにてさげびけり」と、賢学が慌てふためいている様子をより臨場感あふれる表現に改変している。姫君が蛇体となり、やがて龍となるその絵の移り変わりは、酒井家旧蔵本と武蔵野大学本では、蛇体となった姫君の顔が「般若」のように見える。能面の一種として知られる般若だが、般若面の特徴をここで確認しておきたい。

面打ち般若坊が創作した面であるので、般若という名称があると伝えられる。この面は女性の極限の嫉妬と恨みを表現したという。金泥を塗った二本の角があり、頭髮が乱れ、突出してしかめた眉の下に大きい目がある。口は大きく裂けて歯と牙が見える。目と歯には金具がはめられている。そして、耳がある。鬼のように見えるが、実は女である。面を上下に分けて見てみると、目の上部のしかめた眉は悲しみの感情を表し、下の部分は強烈な怒りを感じさせ

る。面打ちによって、面もそれぞれ表情が異なるのだが、般若面の一般的な特徴は右のごとくである。

さて、『賢学草子絵巻』の若僧を追いかけている女は、蛇体もしくは龍に見えるにもかかわらず、顔だけは蛇にはなっていない。千野香織氏により、顔は般若面の形相だと指摘されている。^(注2) 二本の角、金具をはめた大きい目、そして上に裂けた口は確かに般若面の特徴に当てはまる。だが、走っている場面でも、鐘を巻いている場面でも、この蛇体になった女の顔をよく見ると、お歯黒をしていることがわかる。お歯黒は古代中世貴族の慣習で、化粧の一つである。平安末期になり、若い女性ばかりでなく、貴族の若い男性もお歯黒をした。室町時代に至り、一般庶民の大人までも行った。つまり、お歯黒は一般的なことだと言えるだろう。能は室町時代に大成し、多くの面がこの時期に創作された。現存する多くの女面も男面も、ほとんどお歯黒をしている。これは室町時代の習慣が残ったものである。

しかし、『賢学草子絵巻』が成立した江戸時代は、お歯黒の習慣は貴族の男子と成年の女性に限られた。したがって、『賢学草子絵巻』の十六歳の姫はおそらく付けていないだろう。では、なぜ蛇体になった時点から付けているように描かれているのかといえは、能面から影響を受けたためではないかと考えられる。

(リ) 第十回後の地の文では、武蔵野大学本は酒井家旧蔵本に比べて本文量が少ないこともあり、恐怖心を煽られる印象

は少ない。

古寺に着いた賢学は鐘の中に逃げ込むが、酒井家旧蔵本では「古寺のありけるうちへにげ入てみればつきがねをおろし」としているのに対し、武蔵野大学本では「古寺のありけるにかねをおろし」と、説明の省略をはかっている。また、蛇体となった姫君が「いかにして知けむ」かを、武蔵野大学本では「しりて」と当然わかっていたかのように表現している。

酒井家旧蔵本では「さしもをとなしの漣とやついにながれ出んとあるふるごとにおもひよせしことの葉をばおもひ出たまはずや」としているところを、武蔵野大学本では「そのことの葉をおもひ出たまはずや」と簡略化している。これは武蔵野大学本での歌の贈答の中に欠となった部分があることに関連し、山沢与平の判断で削除し、指示語ではかすつつも賢学の過去の発言における伏線の回収を読者に示している。

賢学が鐘の中に逃げ込む場面では、酒井家旧蔵本では「下へ」と、武蔵野大学本では「中に」となっている。どちらも内部という意味では合致しているものの、武蔵野大学本は更に賢学の恐怖心をあらわし、鐘の中でじっとしているという印象を与える。この差は、山沢与平の生きた年代である幕末と酒井家旧蔵本の成立した年代である延宝年間とで解釈に差があったということであろう。

酒井家旧蔵本の第十一回後の本文「かねはみちんにくだ

けて」に対し、武蔵野大学本は「かねはくだけぬ」とあつさりとした表現に止めている。

(又)最後の地の文でも、武蔵野大学本には酒井家旧蔵本のよう「賢学の弟子が古寺を訪ね、あとをとぶらいける」という描写はなく、所属不明の僧が「供養し」ている。そして、「となむ」と登場人物を突き放した表現によって、物語のクライマックスの場面をより強調するような表現にしている。酒井家旧蔵本では賢学を供養しているのは賢学の弟子である。第十三回の台詞部分で、酒井家旧蔵本では弟子の一人が「妙法蓮華経」と唱えていることから、酒井家旧蔵本と武蔵野大学本には宗教的色彩の差がうかがえる。

酒井家旧蔵本では、不謹慎な様子の僧侶も描かれているが、そこには今までの緊迫した空気を打破するような滑稽さが滲み出ている。武蔵野大学本には、全体的にユーモラスな部分が削除されている傾向が見られる。

武蔵野大学本『賢学草子絵巻』は、酒井家旧蔵本に比し非常に簡略化され、また、説話的ユーモアの一切を排除した味気ない本文ともなっている。絵に注目してみても、物語の展開に関して重要な場面である箇所が描かれていないことも、その印象を抱かせる要因となっている。筆者山沢与平は何を意図し、この絵巻を製作したのか、あるいは何かの風刺、ないし主張が込められていたのか、等の考察については今後の課題としたい。

五、武蔵野大学本の筆者「文守与平」について

武蔵野大学本では最後に「六十九翁文守与平」と書かれている。この「文守」というのは山沢与平の号の一つである。

山沢与平は、幕末から明治頃にかけての紀伊藩士であり、画家であった。江戸に在住していた住吉派の松山藩絵師遠藤広実を師匠とし、絵を学んだ。その才は、紀伊藩十代藩主の徳川治宝（一七七一〜一八五三）から評価され、古典を題材にした大和絵や、古い絵巻の模写などを積極的におこない、治宝の留筆となつたともいう。全体に淡白な画風が特徴である。その筆致や彩色からは、下絵のような印象さえ受ける。

与平の没年に関して、和歌山県立博物館ホームページでは、「73歳の作が残ることから、明治20年（1887）頃まで活躍していた」とされている。活躍の時期と照らし合わせても、款記にある「六十九」という数字は山沢与平の年齢そのものを表していると考えて間違いないだろう。また、山沢与平筆の「山部赤人像」（和歌山県立博物館所蔵）には武蔵野大学所蔵本とも重なる点が多く存在する。まず、『山部赤人像』の款記には「行年六十九老学生文守乃與平」とある。この款記を見るだけでも、武蔵野大学本と重なる個所がある。そして、波の描き方にも類似点があるといえる。その描き方について、「より古い時代の表現を用いており、与平の古典学習の跡がうかがえ^(注4)」るとされている。酒井家旧蔵本の『賢学草子』と比べても、波の描かれ方には違いが見られ、これは武蔵野大学本が山沢与平の作であることの裏付けとなるだろう。

なお、和歌山県立博物館には、山沢与平筆の「日高川草紙」が所蔵されているが、武蔵野大学本との関連等については未検討であり、今後の課題としたい。

〔注〕

〔注1〕酒井家旧蔵本の本文は、『新修 日本絵巻物全集 第18巻』梅津次郎・岡見正雄編、一九七九年、角川書店に所収、翻刻されている本文による。

〔注2〕千野香織「日高川草紙絵巻にみる伝統と創造」『金峯叢書第8輯 史学美術史論文集』徳川黎明会編、一九八一年、思文閣出版
〔注3〕「和歌山県立博物館ニュース」〈<http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp>〉（平成二十七年二月十二日アクセス）
〔注4〕注3に同じ。

〔参考資料〕

『国史大辞典 第三巻』国史大辞典編纂委員会、一九八三年、

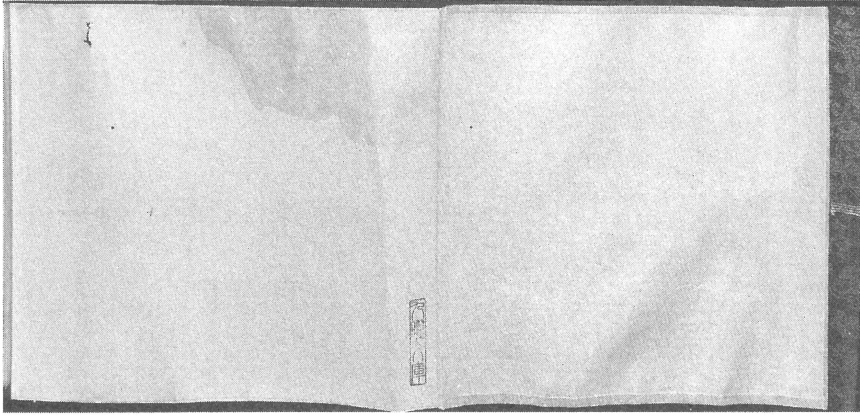
吉川弘文館

『能楽大事典』小林貢・西哲生・羽田昶、二〇一二年、筑摩書房

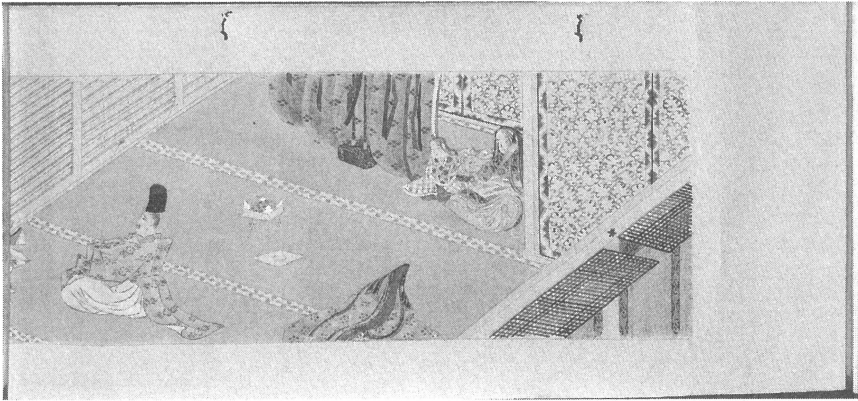
〔参照ホームページ〕

『思文閣 美術人名辞典』〈http://www.shibunkakudo.co.jp/biography/search_biography.php〉（平成二十七年二月十二日アクセス）

「和歌山県立博物館ニュース」〈<http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp>〉（平成二十七年二月十日アクセス）



↳(見返し)



〔第一図〕

↳(第一紙)



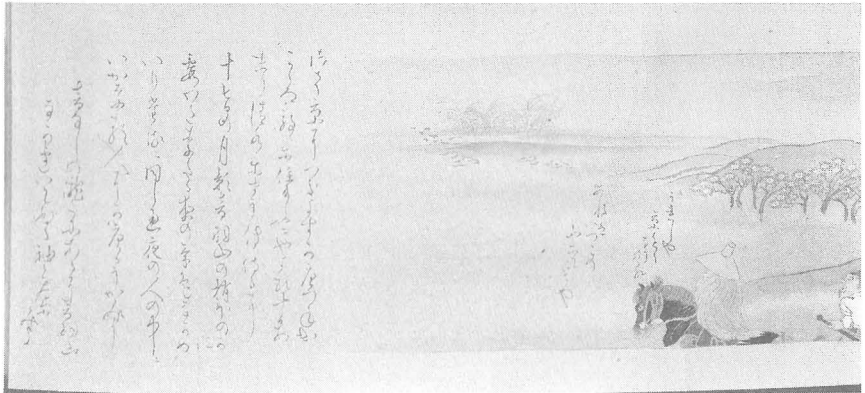
〔第二図〕



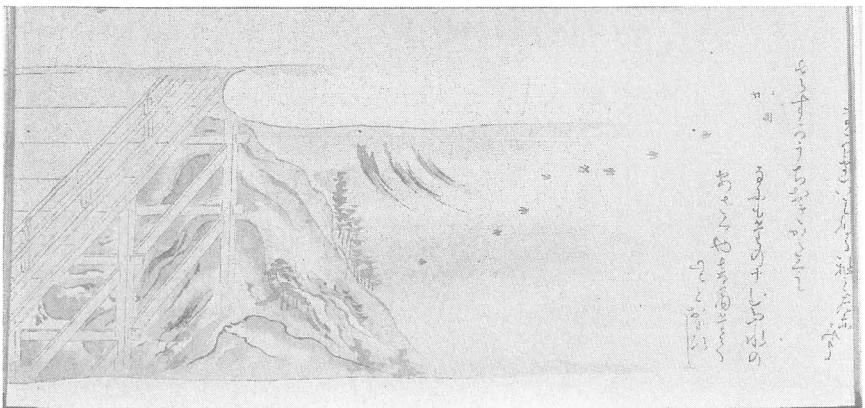
〔第三圖〕

↳(第二紙)

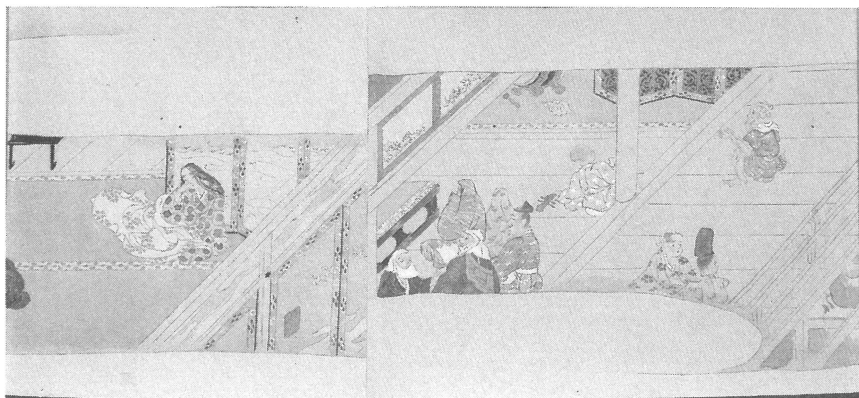
〔第二圖〕



〔第三圖〕



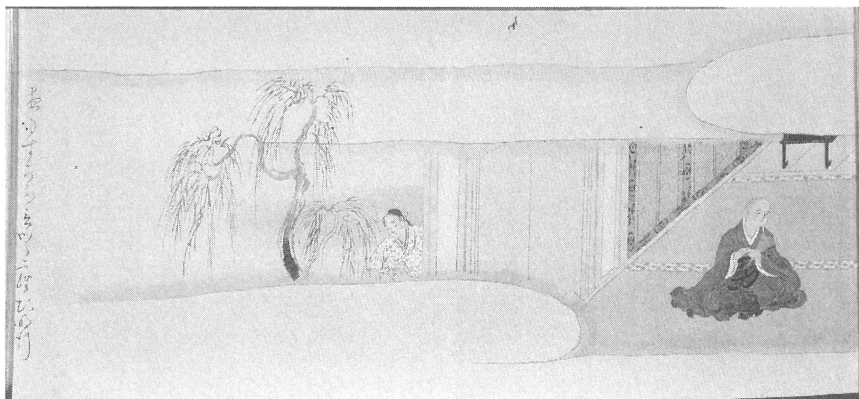
〔第四圖〕



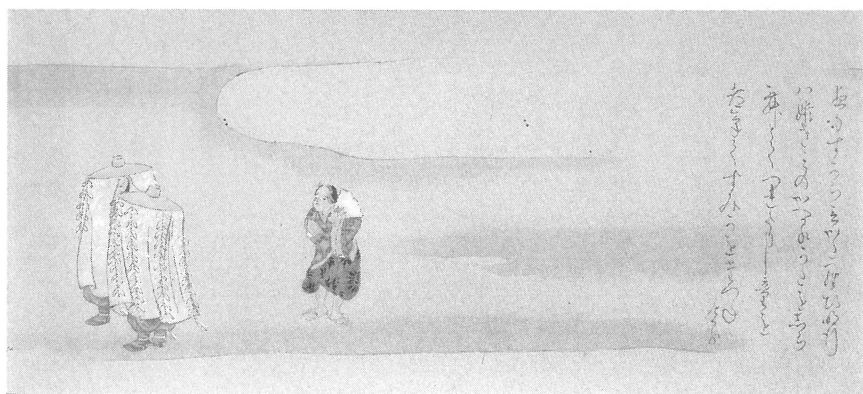
〔第五図〕

↳ (第三紙)

〔第四図〕



〔第五図〕

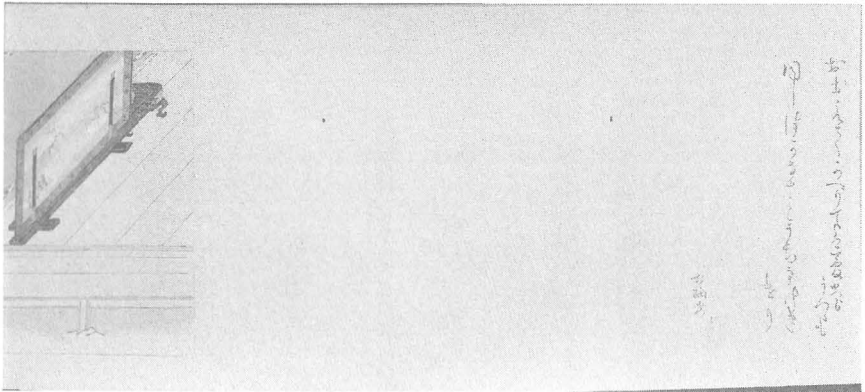


〔第六図〕

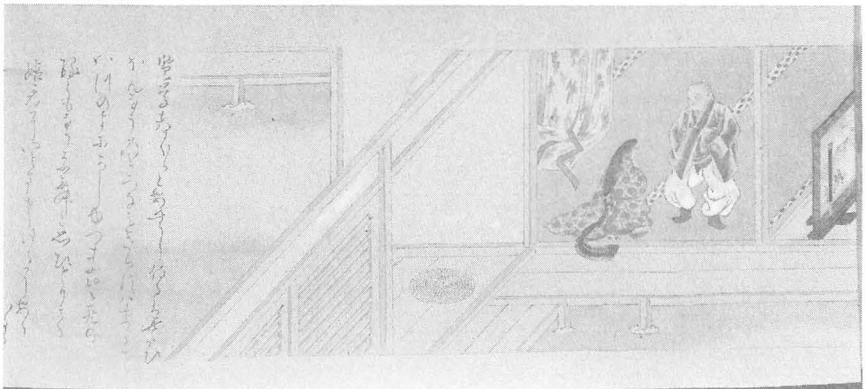


↳(第四紙)

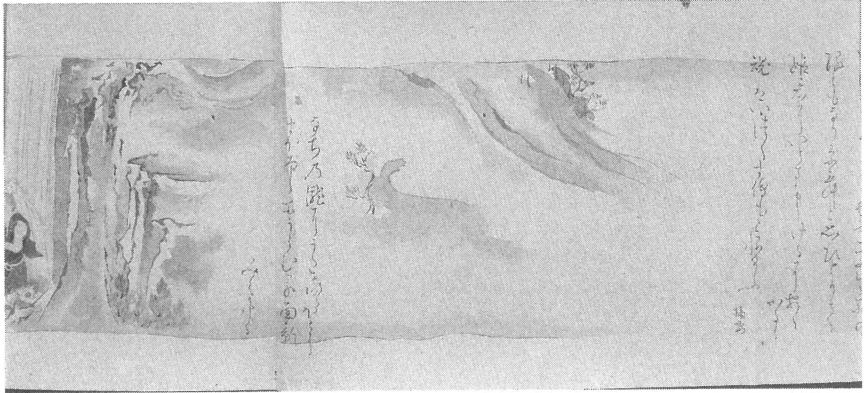
(第六図)



(第七図)

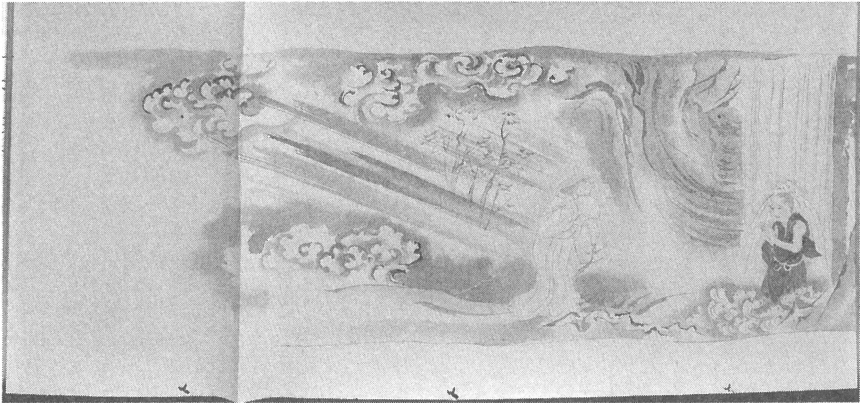


(第七図)



〔第八圖〕

↳(第五紙)



〔第八圖〕



〔第九圖〕



└(第六紙)

[第九図]



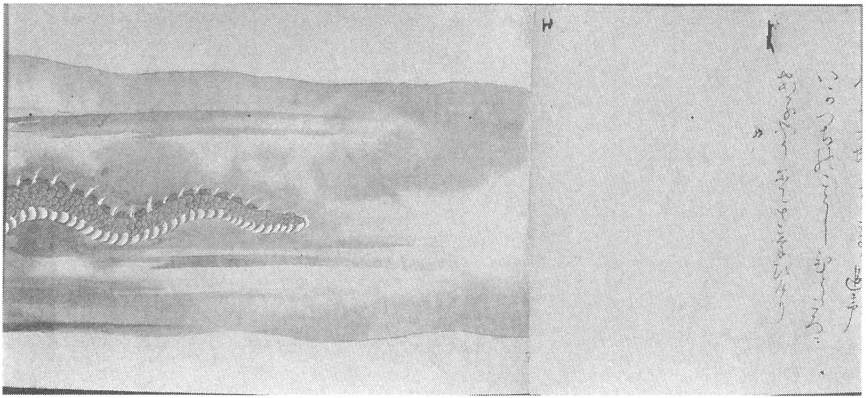
[第九図]



[第九図]

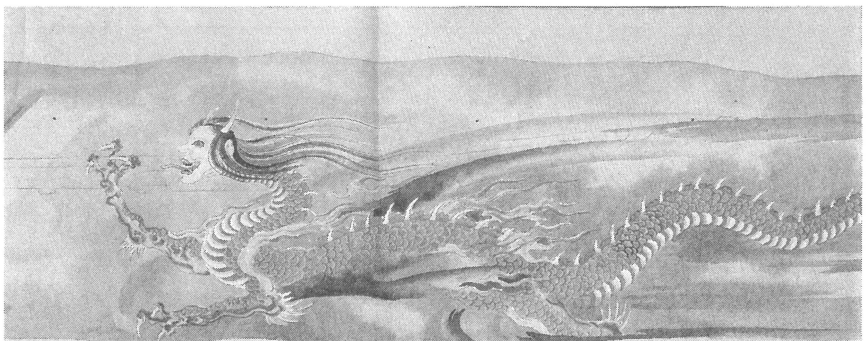


〔第九図〕



〔第十図〕

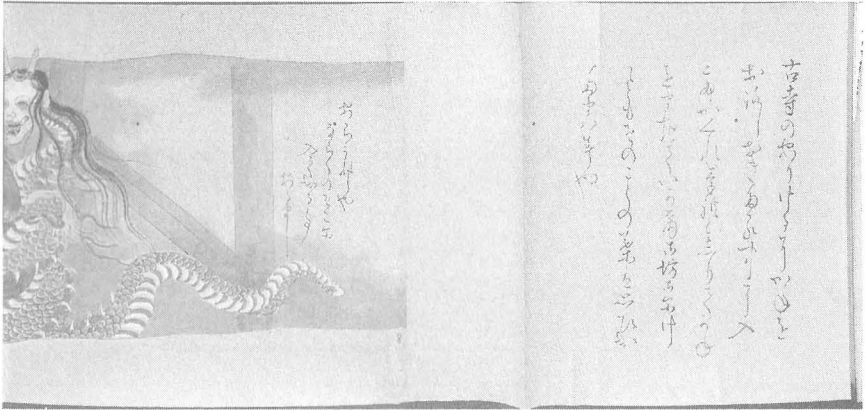
└(第七紙)



〔第十図〕



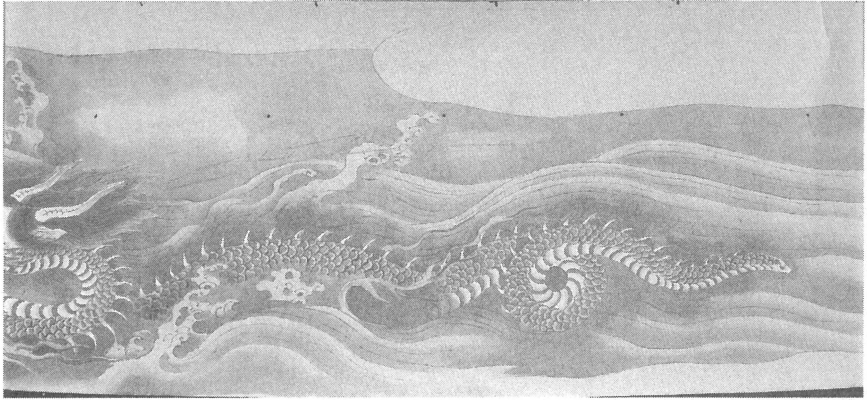
〔第十図〕



〔第十一図〕



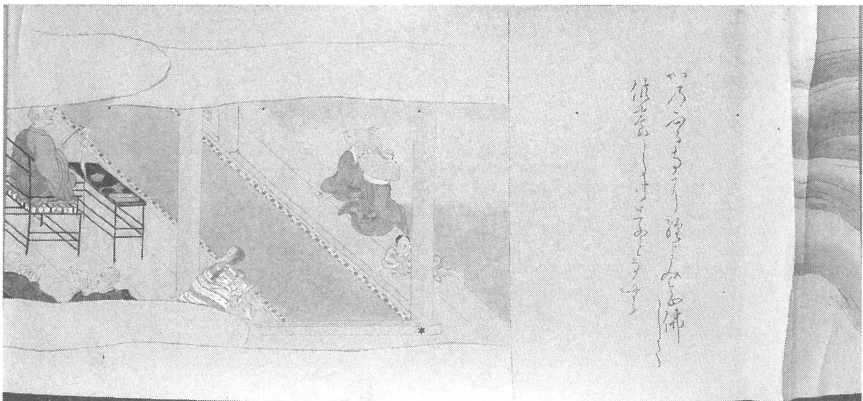
〔第十一図〕



〔第十二図〕

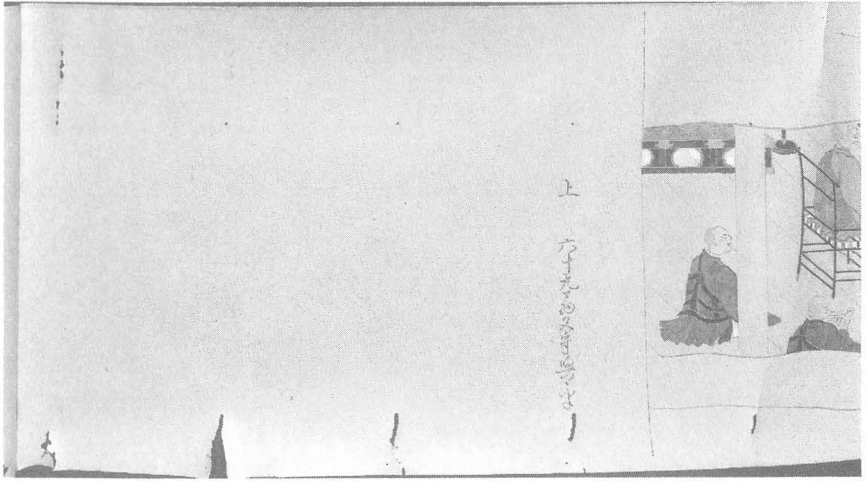


〔第十二図〕



〔第十三図〕

↳(第八紙)



┆(第九紙)

[第十三図]